

# 介護福祉士養成教育におけるグループ研究

—授業実践と研究課題の傾向—

## Choice of Topics of Group Studies in Care Worker Education

— The Teaching Process and Trend in Choice of Research Topics in Group Studies —

柘 崎 京 子

Kyoko FUKIZAKI

西 川 ハンナ

Hanna NISHIKAWA

人 見 優 子

Yuko HITOMI

中 井 紀代子

Kiyoko NAKAI

### 要約

本研究は、グループ研究の形態で行う「卒業研究」の研究課題決定に関する授業実践の評価を行い、学生の研究課題の傾向から、今後の介護福祉士養成教育における教育的アプローチへの示唆を得ることを目的とした。結果、①授業実践の評価として、グループ活動を促進するには「グループ学習のねらい」や「授業計画」を提示し、学生の準備を整えることが大切である。②研究課題の傾向をみた結果、実習で得られた体験から問題意識を深め、自分の課題に向き合う姿勢を評価できた。一方、幅広い視点が持てるには2年生課程における限界も示唆されたが、学生が現在捉えている関心に引きつけて社会的な視点もてるような指導を行うことが大切である。③カリキュラム改正により社会福祉系科目を含め、現在の介護福祉実践を形成してきた科目への比重が低下した。国が指定する教育内容は教育の前提条件であるため、現行カリキュラムの検証を行うとともに、介護福祉士養成教育の前提条件をどう作っていくかの課題があることを指摘した。

**キーワード：**介護福祉士養成教育 グループ研究 研究課題 参加型学習 カリキュラム

## 目次

- I はじめに
- II 研究科目の概要
- III 研究目的・方法
- IV 結果および考察
- V まとめ

### I はじめに

本学は、1990（平成2）年より介護福祉士を養成しているが、カリキュラムの中心に介護実習を据えている。介護実習を中心とするカリキュラムの特徴の1つとして、介護実習及び2年間の総括学習として行う卒業研究がある。

介護福祉士養成教育はカリキュラム改正が行われ、2009年度からは新カリキュラムが実施されている。本学の旧カリキュラムにおける卒業研究は、全実習終了後の2年後期に設定しており、一学生一論文、最低12000字を原則とする個人研究であった。学生個々の関心や問題意識を大切にする理由により、研究課題の設定にあたっては「実習の中から得られたもの」と広く設定し、研究方法も限定していない。研究方法を統一しないことで学生は個性豊かな研究を実施してきたが、介護実践における研究の必要性・目的・研究方法を理解できるという意義においては、成果のばらつきがみられた。

他方、近年の学生の状況として、自己表現力やコミュニケーション能力に乏しいという問題が指摘されている。これらの課題に対し、本学では、2004年に実習目標の再構築を図った際に、「コミュニケーションと関係作り」を実習目標の第一項目に設定した<sup>1)</sup>。そして、学内での取り組みにおいても、2008年以降、コミュニケーション能力やチームワークの育成を目的としたグループ活動や、学生参加型の場を設定してきた<sup>注1)</sup>。

グループでの活動形態や学生参加の活動は、様々な経験を与えてくれる。例えば、コミュニケーションやチームワークを学ぶだけでなく、グループにより課題遂行・課題解決するための方法を経験する、自らの主体性や責任に気づきそれを発揮する、個人の必要性や自己の性格特性に気づくなどである。さらに、グループ学習は仲間に学び・教える場となり、仲間作りにも寄与する。介護実践は、人間同士の関わりとチームワークを基盤に展開されるという特徴があるが、グループ活動が作り出す教育的意義は大きい。

以上の教育的理由により、本学では、2009年カリキュラム改正の際に、研究科目の設定方針を次の2つに置いた。1つは、旧カリキュラムの卒業研究で課題としてきた研究方法のばらつきを解決すること、2つは、グループ学習や学生が主体的に活動する参加型授業を取り入れることである。その結果、1つめの課題に対しては、事例研究を全員に体験

させることとし、研究形態を個人研究とする「事例研究」を設定した。2つめの課題に対しては、研究形態をグループ研究とする「卒業研究」を設定した。ここでのグループ研究は、研究プロセス全てにグループで取り組むことを意味し、グループ学習で得られる教育成果を目的としている。

よって、科目「卒業研究」は、チームワークや課題解決能力の育成をはじめとするグループ学習による教育成果をねらいとし、学生が主体的に活動する参加型授業を軸に授業を計画した。しかし、本科目は新規科目である上に、現執筆時点では授業進度途中にある。そのため、授業の改善を進める上での形成的評価として本研究を設定する。まず、本学における研究科目の目的・方法、関連科目との関連性や「卒業研究」の授業概要を報告し、次に、卒業研究のグループ決定に至るまでの授業内容を述べる。これらの授業実践を踏まえ、今後の介護福祉士養成教育における教育的アプローチへの示唆を得ることを目的とした。

## II 研究科目の概要

### 1 カリキュラムにおける位置づけ

本学は2年課程の介護福祉士養成校であり、研究を授業内容とする開講科目は「卒業研究」「事例研究」である。

介護福祉士養成カリキュラムの基準として示されている教育内容での科目配置から言えば、「卒業研究」は『介護総合演習』、「事例研究」は『介護過程』の教育内容として開講する科目である（表1）。ともに、2年次後期の開講である<sup>注2)</sup>。

表1 教育内容『介護実習』『介護総合演習』『介護過程』における開講科目と科目配置

		本学における科目構成							
介護福祉士養成の教育内容	指定時間	1年				2年			
		前期		後期		前期		後期	
介護実習	450	介護実習Ⅰ (地域実習)	6月末 (45h)	介護実習Ⅱ (基礎実習)	2月 (90h)	介護実習Ⅲ (訪問介護実習)	5月 (45h)	介護実習Ⅴ (総括実習)	9月 (135h)
						介護実習Ⅳ (継続実習)	5～6月 (135h)		
介護総合演習	120	介護総合演習Ⅰ	(30h)	介護総合演習Ⅱ	(30h)	介護総合演習Ⅲ	(30h)	卒業研究	(30h)
介護過程	150	介護過程Ⅰ	(30h)	介護過程Ⅱ	(30h)	介護過程Ⅲ	(30h)	事例研究	(60h)

## 2 「卒業研究」の授業のねらいと展開

### 1) 「卒業研究」「事例研究」の授業概要

シラバスに示した「卒業研究」「事例研究」の目的は、表2の通りである。

また、両科目における研究科目としての研究形態、研究方法、研究成果の発表方法、提出論文の文字数についても表中に示した。

表2 「卒業研究」「事例研究」の授業概要

	卒業研究	事例研究
授業の目的	介護実習をはじめとする2年間の学習を総括するために関心のある研究課題を設定し、グループで研究を行う。 卒業研究を行う目的は、次の通りである。 ①自己の関心・問題意識に基づき研究課題を設定し、主体的に取り組むことができる。 ②他者と意見交換し、自己の問題意識を深めると共に他者から学ぶことができる。 ③調べる・話し合う・発表するという行為を通し、チームワークを身につける。	実習で展開した介護過程の展開事例をもとに事例研究を行う。 事例研究を行う目的は、次の通りである。 ①事例研究を通し、介護過程の実践についての評価ができる。 ②学内での学びや、介護実習を通して疑問に思ったことを深めることができる。 ③事例研究を通し、研究方法及び研究的態度を身につけるとともに問題解決能力を高める。
研究形態	グループ研究	個人研究
研究方法	方法は限定しない (文献研究、調査研究、事例研究など)	事例研究
研究成果の発表方法	発表要旨、パワーポイントを用いて口頭発表	発表要旨を用いて口頭発表
提出論文の文字数	4000字以上	12000字以上

### 2) グループ研究のねらい

「卒業研究」の授業目的は表2に示したが、本科目の主たるねらいは、グループで卒業研究の課題にあたることにより得られるグループ学習による成果にある。表3に、本科目がねらいとする「グループ研究のねらい」を示した。

表3 グループ研究のねらい（グループ学習による成果）

コミュニケーション能力の向上	調べる・話し合う・発表する行為を通し、言語化する力、表現する力を育てることができる
	集団内における対人関係能力や、人間関係形成スキルを高めることができる
チームワークに対する学び	調べる・話し合う・発表する行為を通し、チームワークを身につけることができる
	個人の役割を自覚し、役割分担の意義を学ぶことができる
	チームワークに必要なメンバー間の関係形成、協力方法を学ぶことができる
主体性・社会性・協調性の促進	関心のある研究テーマに取り組むことにより、内的動機が高まり主体性を発揮できる
	グループで決めた分担の役割遂行を通し、主体的な態度を学ぶことができる
	集団活動を通し、主体性・社会性・協調性を促進することができる
実践力を高める	グループで研究テーマに取り組むことにより、グループでの課題解決力を高めることができる
	グループで研究活動を行うことにより、多様な視点に気づくことができる
	価値・知識・技術に対する新たな学び、学びの統合ができる
	自己の問題意識を深めることができる
自己理解・他者理解への気づき	自己の態度・感情・思考に対する気づきが得られる
	他者の長所に対する気づきが得られる

### 3) 「卒業研究」の授業計画

#### (1) 関連科目の授業進度

初めて研究を行う者にとって、研究課題の設定は最初の関門である。また、文献検索方法など、研究を始める前に知っておかなければならないことがある。

表1に示した通り、本学では、最終の介護実習を9月に設定しているため、卒業研究は、実習終了後の9月末からの開始となる。研究課題別に研究グループを編成し、1月末までに研究発表・論文完成するには、9月末からの開始では時間が足りない。そのため、前期授業期間内の「介護総合演習Ⅲ」の中で研究の準備を行うことにした。

表4は、2010年度の2年次前期科目として配置した「介護実習」「介護総合演習」「介護過程」の授業進度表である。

「介護総合演習Ⅲ」は、介護実習Ⅲ・Ⅳの実習前・中・後の学習に対応した授業である。介護実習Ⅳでは介護過程の展開を行うが、実習に並行して、「介護総合演習Ⅲ」「介護過程Ⅲ」を表4のように実施した。つまり、6月以降の「介護過程Ⅲ」では、学生個々が介護実習Ⅳで展開している介護過程をサポートする授業を行い、同時期の「介護総合演習Ⅲ」では、後期の研究科目の準備を行うための授業を計画した。

表4 2年次前期科目「介護実習」「介護総合演習」「介護過程」の授業進度(2010年)

科目 進行	介護実習			介護総合演習Ⅲ	介護過程Ⅲ
	実習			(約10人のゼミ形式)	(約20人の2クラス制)
4月				実習ⅢⅣの事前学習、実習準備	紙上事例を元にした介護過程の展開
5月	介護実習Ⅲ (訪問介護実習)	集中	6日		
	介護実習Ⅲ (継続実習)	集中	5日		
6月			継続	2日 ×6週	(実習の共有、実習中の課題解決 など、実習と関連した内容)
	後期「卒業研究」「事例研究」の 準備 ①研究の基礎的知識を身につける ②「卒業研究の研究課題決定」に つなげるためのラベルワーク			学生個々が介護実習Ⅳで展開して いる介護過程を深めるための授業	
7月				・実習Ⅳの事後学習 ・実習Ⅴの事前学習、実習準備	・介護過程展開シートの記入 ・カンファレンス ・アセスメント～介護計画立案

#### (2) 研究準備のための前期授業計画

後期の研究科目の準備と、卒業研究の研究課題決定につなげるための授業を、前期授業期間中に表5のように実施した。研究課題検討の授業は、「ラベルワーク」の技法を用いて実施した<sup>2)</sup>。

表5 卒業研究準備のための前期授業計画 (2010年)

授業回数	日時	項目	内容
1	6月8日	①研究の基礎的知識を身につける	・研究方法の種類と活用方法について理解する ・文献検索方法について理解する
		②ラベルワークのオリエンテーション	・6月15日～7月13日の内容について理解する ・7月13日発表順番決定、役割分担して解散
2	6月15日	③文献検索	・図書館にある文献や先輩の卒業研究などに目を通し、介護に関する研究として関心あるテーマを各自で整理する
3	6月22日	④ラベルワークの準備	・関心のあるテーマ、なぜ関心を持ったか(動機や根拠)、どんな文献があるかなどをメモして整理する
4	6月29日	⑤テーマ「卒業研究でとりくみたい研究課題」についてのラベルワーク	・9～10人のグループ活動。グループは介護総合演習のゼミ別に編成。 ・ラベルワーク活動により、関心のある研究課題を整理する
5	7月13日	⑥ラベルワーク結果の発表	・ラベルワーク結果をポスター作成し、グループごとに発表する
夏期休業中		ラベルワーク結果により出された研究課題を教員が整理	

注) 7月6日は「実習Ⅳの事後学習」の授業とした。

(3) 「卒業研究」の授業計画

後期科目である「卒業研究」の授業計画は、表6の通りである。

表6 「卒業研究」授業計画 (2010年)

回	日時	ねらい	内容	資料など
1	9/29	学習準備① ラベルワーク結果の共有	・前期に作成したラベルワークのポスターを、全員で共有する ・前期のラベルワークの整理結果から把握できた「学生の研究課題に関する関心状況」についての説明を受け、今後の検討に活かす	①ポスター縮小版 ②結果整理の資料
		希望研究課題の提出	・「希望する研究課題と理由」を検討し、2枚のカードに記入し提出する	③記入カード2枚
2	10/6	学習準備② 研究グループ編成(4～5人編成)	・学生が希望する研究課題とグループメンバーを考慮し、教員が卒業研究グループを検討し、学生に提案する ・学生の同意、学生と教員双方による調整に基づき決定する	④メンバー予定表
		「卒業研究」授業概要の理解 グループ活動の準備	・授業目標、授業方法(学生参加型、グループ学習による共同研究)についての説明 ・決定した各グループに分かれ、顔合わせ ・1人1役活動の分担 <<リーダー、進行、書記(記録・出席管理)、資料係、パソコン>>など	⑤授業目標・授業予定表
3	10/13	研究の準備	・研究課題について、それぞれが考えている研究動機や研究イメージ(内容・方法など)について意見交換する ・研究のために行うべきことの検討、研究スケジュール案の検討	⑥研究スケジュールのイメージがもてるための資料
4	10/20	研究活動	・研究グループごとにすすめる	
5	10/27	研究活動	・研究グループごとにすすめる	
6	11/8	全体 効果的プレゼンテーション	・パワーポイントの効果的作成方法を学ぶ(270分授業/PC教室)	⑦講義資料
7	11/10	研究活動	・研究グループごとにすすめる	
8	11/13	全体 卒業生から学ぶ	卒業生4人によるシンポジウムに参加 みんなで語ろう!「私の介護」～未来をつくるために～	11/17の授業振替
9	11/24	中間発表 ①研究の中間発表	・発表: 1～4グループ(1グループ発表10分)	進行: 1グループ
10	12/1	②意見交換 ③発表に対する評価	・発表: 5～8グループ(1グループ発表10分)	進行: 2グループ
11	12/8	研究活動	・研究グループごとにすすめる	
12	12/15	研究活動	・研究グループごとにすすめる	
13	1/12	発表 研究発表と発表に対する評価	・パワーポイント、抄録を用いて発表する ・グループメンバーの総意により、各発表に対し相互評価を行う	進行: 3・4グループ 進行: 5・6グループ
		発表に対する評価	・相互評価結果の発表	まとめ
14	1/19	研究活動	・研究発表の成果を踏まえ、論文完成に向けた研究活動	: 7・8グループ
15	1/26	論文、要約提出(締切: 12:00)	・①論文4000字以上、②要約(実習報告書原稿)提出	実習報告書作成の準備: 7・8グループ

### Ⅲ 研究目的・方法

#### 1 研究目的

本研究の目的は、グループ研究の形態で実施する「卒業研究」における研究課題の決定について、その授業実践の評価を行う。そして、学生の研究課題の傾向から、今後の介護福祉士養成教育における教育的アプローチへの示唆を得ることである。

#### 2 研究方法及び研究期間

研究対象は、①研究課題決定に対する授業実践、②前期授業で行った「卒業研究の研究課題決定につなげるためのラベルワーク」結果の図解として学生が作品化したポスター4枚の中に研究課題として記入されていたラベル165枚（以後、「素材1」とする。）、③「卒業研究」の第1回授業で学生が各自2枚提出した「希望する研究課題と関連領域」についての資料（以後、「素材2」とする。）である。

研究方法は、素材1及び素材2に記入された内容を分析する。

### Ⅳ 結果および考察

#### 1 「卒業研究の研究課題決定につなげるためのラベルワーク」の授業実践と結果の分析

##### 1) グループ研究への動機付け

グループ研究である「卒業研究」への動機付けを目的に、前期授業の中で、学生が主体的に活動する参加型授業としてラベルワークを行った。テーマは「卒業研究でとりくみたい研究課題」であった。

グループ研究の動機付けとして行うねらいは、①研究科目に対する興味を持てる、②研究課題に対する意見交換を通し気づきや関心が広がる、③グループメンバーと協力し合うことができる、④主体的態度で参加できる、である。とくに③④を促進するために、「表5：卒業研究準備のための前期授業計画」に記した授業5回のうち、2～5回の授業は、基本的にはグループの自主運営により進行することにした。そのため、ラベルワークの方法に関する配布資料に加えて、下記の資料1を配布し、授業1回目に役割分担を行った。

グループメンバーをゼミメンバーとすることでメンバー間の交流ができていた素地もあり、また、ポスター発表という目標が設定されているため、役割分担や自主進行の課題に対してはスムーズにとり組むことができた。しかし、ラベルワークのラベル図考を行う際は、メンバーの雰囲気により意見交換の程度に差があった。意見交換が活発だったグループは他者の発言による刺激を素直にその場で表現し、楽しい雰囲気であった。不活発だったグループもあったが、ポスター発表を通し他者から学ぶ機会となった。

写真は、学生が作品化したポスターである。

授業配布資料 1

**ラベルワークとは？**

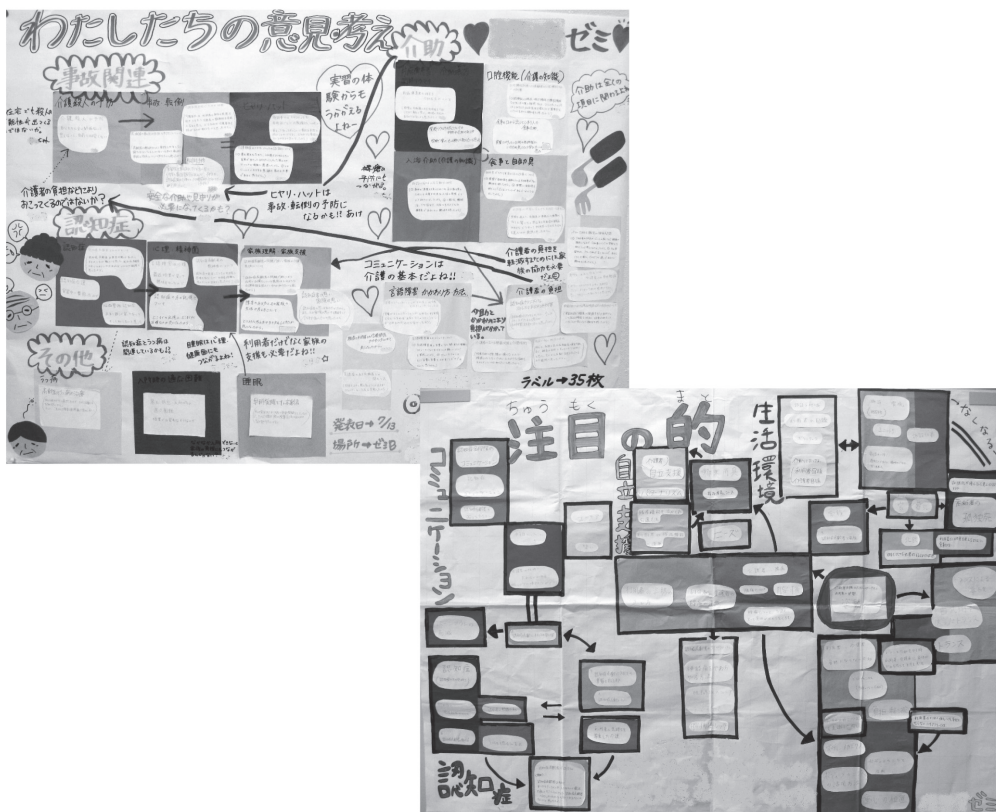
① **ラベルワーク：** 知識の発信・交流および図解思考の道具としてラベルを用いる理論と技術<sup>1)</sup>。  
 ② **ラベル図考：** ラベルを目で見ながら手で動かし、図解を作成する<sup>1)</sup>。内容を整理する。

**グループでの役割分担 ～1人2役！を決めて行いましょう～**

役割分担	内容	人数	担当
1 お世話係A (発表当日までの準備)	【物品の準備】 模造紙1、折り紙セット1、マジックセット1、のり、はさみ、他 ラベル:A4用紙を3つ折りして切った紙(10.5×7.5cm)を人数×8枚分	1～2	
2 お世話係B (発表開始前までの準備と、終了後の片付け)	【ワークしやすい環境設定】机・椅子の配置、換気など 【終了後の片付け、美化】	1～2	
3 司会	ワークを目的に沿って進行する	1	
4 ムード係	ワークが良い方向に向かうようなムードメーカーの役割 ・進行しやすい、深まりやすいように ・意見交換できやすいように ・魅力ある発表になるように	1～3	
5 タイムキーパー	進行上の時間管理	1	
6 スパイ係	他のグループの良いところを、こっそりのぞいてくるスパイ	1～2	
7 ラベル管理係	使用したラベル等を管理する ラベル図を完成させる	4～5	
8 発表係	発表準備を行い、発表する	4～5	

◇ ラベルワーク日：6月29日 ポスター発表日：7月13日  
 ◇ 全員に役割が2つあります。 < 1.～6.の中から1役、7.～8.の中から1役、選びましょう。 >  
 ◇ 今回のワークでは、ラベルワークの進め方を、事前に理解しておきましょう。

引用文献1) 林義樹・金城祥教編集『看護の知を紡ぐラベルワーク技法-参画型看護教育の理論と実践-』清新看護出版、2004年  
 参考文献 <http://www.pi-forum.org/act/ws/worksh10.html> (2010.5.3取得)





## 2) 素材 1 の分析と次の授業への取り組み

素材 1（学生が作品化したポスター 4 枚の中に研究課題として記入されていたラベル 165 枚）は、研究課題について学生がもつ関心課題を自由に書いたものである。この素材 1 の分析を 2 つの視点で行った。分析は、本学教員（介護系科目担当・福祉系科目担当）が同時に分類し、確認しながら作業を行なった。

第 1 は、関心の領域についての分析である。これについては、本学が設定している「介護実習の目標 6 領域」に分けて分類した（6 領域：コミュニケーション、利用者理解、生活支援技術、介護過程、組織理解、専門職理解と態度）。165 のうち 158 のラベルを「介護実習の目標 6 領域」に分けて整理できた。分類結果を図 1 に示したが、「生活支援技術」「コミュニケーション」に集中していた。学生が関心を持っている「生活支援技術」の内容は、主には介護実習の学びと関連する食事介助や移乗技術など、学生にとって身近な内容が研究課題として設定されていた。しかし、認知症者への対応方法や自立支援、生活環境など、より関心の拡大した内容の記述についても、「生活支援技術」として整理した。

第 2 は、関心の次元についての分析である。研究課題の視点としてどの範囲で関心を持っているかを、社会福祉の実践のサイズで分析し、関心の次元を測った。すなわち、ミクロからマクロまで、どのレベルで関心を持っているかの分析である。関心の次元設定は、①学生自身、②学生と利用者、③利用者、④利用者と家族、⑤家族、⑥職員・施設、⑦地域、⑧地域と制度・問題、⑨制度・問題の計 9 領域である。しかし、素材 1 は学生が関心課題を自由に書いたものであり、第 2 の分析を行うには不十分な記入内容があったため、結果として図に示すことはできない。ただし、研究課題に対する関心の次元のほとんどは「学生自身」であり、次いで「利用者」であった。

以上の結果を踏まえ、学生の研究課題に対する関心の領域と次元がより拡大されるよう、「卒業研究」の研究課題を提出する前の授業時に、分析結果を報告することにした。

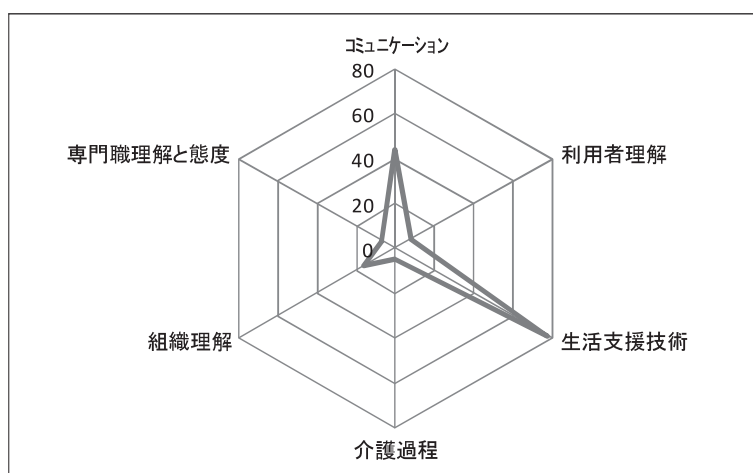


図 1 「介護実習の目標 6 領域」別にみた研究課題内容

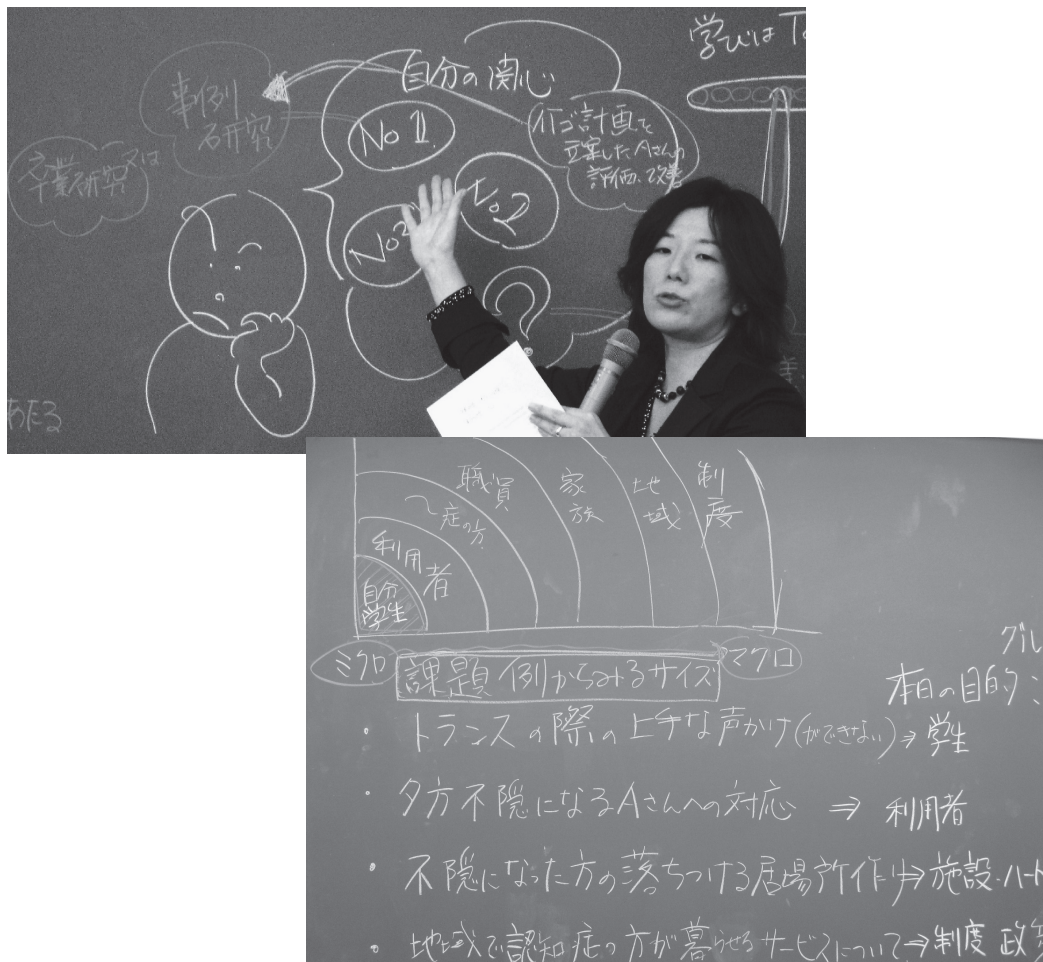
## 2 「卒業研究グループ決定」の授業実践

### 1) 卒業研究グループ決定のための授業内容

後期科目である「卒業研究」第1回目の授業は、次の流れで実施した。

第1に、本日の授業は卒業研究のグループを決定するために希望する研究課題を提出するのが目的であること。第2に、前期に実施した「卒業研究の研究課題決定につながるためのラベルワーク」結果のポスター4枚（A3縮小版）を各自確認し、どのような内容があったかを再確認する。第3に、素材1の分析結果を報告し、研究課題の領域と次元は幅があることを説明した。第4に、①研究課題（関心のあることとその理由）、②研究課題と関連する実習目標、③研究課題の設定次元（「研究課題と関連する領域」と表現し説明。）の3項目を学生に記入してもらった。記入用紙は2枚とし、必ず第1希望、第2希望を明記することを指示した。第5に、「卒業研究授業計画」（表6）と、「グループ学習のねらい」（表3）を配布し、科目のオリエンテーションを行った。そして、第6に、グループ決定は「グループ学習のねらい」を踏まえて教員がグループメンバー案を検討し、メンバー決定は学生の同意を踏まえて決定するため調整は可能であることを伝えた。

写真は、この時の授業風景である。



## 2) 研究グループの編成方法

まず、学生が記入した「研究課題（関心のあることとその理由）」の内容を3人の教員で把握した。研究課題の第1希望を優先しながら、希望する研究課題の類似性によってグループ分けをした上で、メンバーの雰囲気やグループの同質性に配慮してメンバー案を検討した。同質性への配慮とは、友人関係にあり同調性が強すぎる場合は同じグループにしない、課題解決能力を考慮してグループの同質性を担保したという意味である。

教員が提案したグループ案に対し、学生からの異論はなく全員の賛成が得られた。

## 3 希望する研究課題からみた学生の特徴

### 1) 素材2の集計結果

素材2で分析対象とした内容は、「研究課題と関連する実習目標」「研究課題の設定次元（関心の次元）」についてである。素材1の分析枠組みとしたこれら2つの内容を学生に問う方法で、研究課題に対する自己認識を把握した。集計結果は、図2、図3の通りである。

図では、研究課題の第1希望と第2希望それぞれの傾向を把握できる。共通して言えることは、図1「研究課題と関連する実習目標」、図2「研究課題の設定次元（関心の次元）」は、全体的傾向として、ともに第1希望と第2希望を比較した場合、両者に大きな差はないということである。

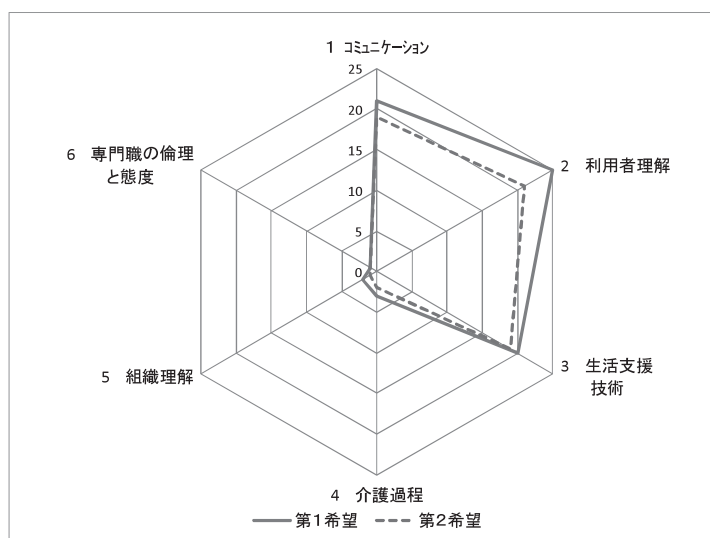


図2 「研究課題と関連する実習目標」に関する学生の自己認識

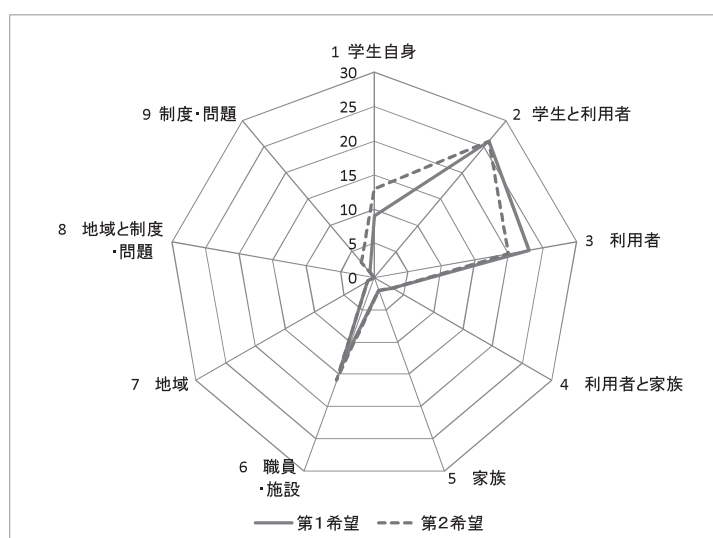


図3 「研究課題の設定次元（関心の次元）」に関する学生の自己認識

## 2) 「研究課題と関連する実習目標」に関する学生の自己認識から見た特徴

「研究課題と関連する実習目標」からみた学生の関心領域は、「コミュニケーション」「利用者理解」「生活支援技術」の3領域に集中していた。これらは、介護実習で学生が実習課題として設定することの多い内容と一致していた。

本学において実習課題を設定する方法は、まず「介護実習目標の6領域」について記述（検討）させた上で、自己の実習課題を2～3の範囲に絞って決定する方法である。この方法は計5つの介護実習全てに共通した方法であり、介護実習のまとめを行うシートでも、実習目標の6領域に対するまとめを行う項目を用意している。つまり、実習課題の設定方法、まとめシートに記入された事実から見ると、6領域に対する学習意識が学生に全くなかったとは言えない。

しかし、学生が研究課題として設定した関心領域は、3領域に集中していた。これについて学生に確認した結果、2つの理由によるものであった。①実習を通し発見した課題や実習で得られた課題を研究課題とした、②もともと関心のあったことを研究課題とした、である。多くの学生は①の理由であり、このことは、実習での気づきや自己の課題として得られた内容を研究課題に設定し、自分の課題に向き合う姿が反映されている。自分の側から課題を積み上げていく、クリアしていこうとする姿勢は、学生の実直な姿として評価できる。

ただし、本来であればこの3領域は、3領域以外の内容である「介護過程」「組織理解」「専門職理解と態度」とも関連するものである。したがって、3領域以外の内容が少ないことには配慮を要する課題がある。「介護過程」については、実習中の介護過程の展開を事例に、科目「事例研究」の中で研究を行うことになっているために選定されにくいという要因もあるが、そもそもは、実習で発見した課題や得られた課題という身近な自己の課題から出発しているのが学生の現状である。その取り組みを評価しつつも、社会的な視点や統合的な視点を要する3領域以外の内容については、学生が現在捉えている関心課題と引きつけて考えていく視点がもてるような指導を行う必要がある。

## 3) 「研究課題の設定次元（関心の次元）」に関する学生の自己認識から見た特徴

「研究課題の設定次元（関心の次元）」からみた学生の関心領域は、第1希望・第2希望ともに「2. 学生と利用者」が最も多く、次いで「3. 利用者」「6. 職員・施設」「1. 学生自身」であった。この結果は、素材1における設定次元のほとんどが「1. 学生自身」であり、次いで「3. 利用者」であった結果とは異なる。研究課題の提出前に、素材1の分析結果を学生に報告したことの効果として、関心の次元が拡大されたのではないかと思われる。

研究課題の設定次元における学生の特徴は2つある。1つは、「1. 学生自身」「2. 学生

と利用者」「3. 利用者」「6. 職員・施設」に関心を向けているということである。これは、前述した「研究課題と関連する実習目標」からみた学生の関心領域の結果と同様に、自分の体験を通して得られた課題に向き合う姿勢として評価できる。

特徴の2つめは、「7. 地域」～「9. 制度・問題」については、関心領域としていないということである。つまり、介護をマクロまで広げて考える社会的な視点が持てるには、養成課程2年間の教育の中では難しい課題があると言えよう。また、学生の経験からみても、人間の成長過程にある若者にとっても、難しい課題であると思われる。これについては、教育内容の検証や科目間の連携も含め、どのように教育を行うかの課題があると受け止めた。

#### 4 新カリキュラムの検証についての課題

本学において新カリキュラムにあわせてカリキュラムの再構築を図った際は、介護実習の構成にあたっては、「地域・暮らし」「個別ケア」「利用者理解」を3つの柱とし、1年次最初の実習は、ミクロな視点から出発するのではなくマクロな視点を持ってその後の介護実習が体験できるよう「地域実習」を設定した。そして、2年次最初の実習もあえて「訪問介護実習」とし、その後の施設実習の視点が拡大できるように意図した。また、旧カリキュラムの専門科目であり、介護実践と関連性の高い科目であった社会福祉系科目やレクリエーション科目、家政学系科目やリハビリテーションなどの科目をできるだけ残したいと考えた。しかしながら、新カリキュラムでは、これらの科目を重要と考える考え方や、教授するための時間が保障されているわけではない。そのため、カリキュラム構成を工夫しても、できることには限界があった。

本学学生の卒業研究の研究課題の傾向については、実習で得られた課題を研究課題とし自己の体験を通し考えていく学生の姿勢を評価した一方で、社会的な視点までは持っていない現状があることを前述した。旧カリキュラムにおける卒業研究では、「実習で得られた課題や自己の関心に基つき研究課題を設定する」として研究を実施していた。旧カリキュラムにおける卒業研究でも、本研究結果と同様に研究の出発点を実習での体験に置き、そこから自己の課題に向き合い、関心を広げていく学生は多かった。新・旧カリキュラムのどちらでも、自己の体験を通して得られた課題を整理し、問題意識を深めていくことが共通している。この点は、研究を行うねらいとしても、介護福祉実践者としてのあり方としても意義深い。ただ、研究科目の設定状況が新・旧カリキュラムは異なるために一概には比較できないが、過去の学生における研究課題は、レクリエーションや訪問介護、自立支援、ターミナルケアなど、学生の関心領域はより広がったと思われる。これは、現学生における傾向、本学の教育内容としての課題、2年課程における限界など、様々な内的要因の可能性を否定はしない。

しかし、カリキュラム改正において「介護」の領域が重視された一方で、社会福祉概論や障害者福祉論など、社会福祉系科目の比重が低下したことによる外的要因も否定できない。新カリキュラムでは、社会福祉系科目の比重が低下したことに加え、介護実践を特徴づける科目であったレクリエーション活動援助法や家政学系の科目が「介護」領域に吸収され、科目として学ぶ機会が保障されなくなった。「福祉職としての介護福祉士」「生活支援専門職としての介護福祉士」として教育実践をしてきた養成校は多いであろう。本学もその1つである。これら大事な価値や生活支援の構築につながる科目が、カリキュラム改正によって教育の機会が減少している（保障されない）という事実は深刻である。実践に対する価値や視点を教育の中で得られること、体系的な学びの体験が得られることは、単に知識の獲得に限らず人間の感性や可能性にも関与すると思われる。

「介護の専門性」については長らく議論されているが、現在の介護福祉実践は、従来の介護福祉士養成カリキュラムにおける専門必修科目との関連性が高い。既に現行カリキュラムとなった新カリキュラムであるが、旧カリキュラムのどこに問題があったかについては、どこでも検証されないまま新カリキュラムに移行した。この現行カリキュラムが介護の役割と専門性を具現化するものであるのか、体系的な学びを保障するものであるのかは、検証されるべき課題である。なぜならば、国により「指定された教育内容」がある以上、これに従って教育内容を組み立てるのは、養成校が自校のカリキュラムを検討する上での前提条件だからである。そして、カリキュラムとは、教育の理念・方法を表すものだからである。介護の専門性や、今後の介護福祉士養成教育の方向性と関連し、教育の前提条件となる「指定内容」「指定カリキュラム」をどう用意するかは課題は大きい。

## V まとめ

本学では、介護福祉士養成のカリキュラムとして、「事例研究」「卒業研究」の2科目を研究科目として設定しているが、研究形態をグループ研究とする「卒業研究」は、チームワークや課題解決能力の育成をはじめとするグループ学習による教育成果をねらいとしている。

本研究の目的は、「卒業研究」における研究課題の決定に関する授業実践の評価を行い、学生の研究課題の傾向から、今後の介護福祉士養成教育における教育的アプローチへの示唆を得ることであった。研究のまとめとして、授業実践の評価と、今後の教育における課題について述べる。

1. グループ研究の研究課題決定に関する授業実践の評価として、下記の2点を挙げる。

- (1) 「グループ学習によるねらい」と「学生が主体的に活動する参加型授業」の2つを授業方針に、「卒業研究」への動機付けの授業を行うとともに、「卒業研究」の授

業計画を立てた。現時点では授業進度途中であるため、授業全体の評価はできないが、実施した内容についての評価を行う。

- ① 2つの授業方針を元に「卒業研究の研究課題決定につなげるためのラベルワーク」を実施した。学生参加型を促すためには授業目標の明確な提示と、主体的な活動ができるための準備が必要である。これについては、授業計画や授業方法の資料を用意し学生の準備を整えたこと、ラベルワークで自分の考えを表現するための準備を行ったことで、授業の目的を達成することができた。
  - ② ラベルワークや研究課題決定の授業前後に「グループ学習によるねらい」を説明し、ねらいを意識できるように動機付けた。また、グループ活動を促進するために、役割分担や「授業計画」を提示した。現在は、研究グループが決定され、グループによる研究準備を行っている段階であるが、研究課題の精選や研究準備など、グループ単位による主体的な活動がスタートしている。グループ活動を促進するためには、「ねらい」や「授業計画」を提示し方向性を明示すること、受身でない姿勢をつくるための準備が大切である。
- (2) グループでとりくむ研究課題を検討する過程を通し、グループ研究のメンバー決定につなげた。研究グループのメンバー編成は、「グループ学習によるねらい」を達成するために、メンバーの組み合わせとグループの同質性に配慮して教員が検討し、学生との調整を図る方法で決定した。研究課題の希望を優先してメンバーを検討したこと、グループ学習のねらいが理解されていたために、グループ編成は問題なく決定できた。

2.「卒業研究」における学生の研究課題の傾向と、研究課題の傾向から得られた今後の課題について、下記の2点を挙げる。

- (1) 学生が設定する研究課題は、実習目標との関連からみた場合は「コミュニケーション」「利用者理解」「生活支援技術」の3領域で、研究課題の設定次元からみた場合は「学生自身」「学生と利用者」「利用者」「職員・施設」の範囲で設定される傾向があった。これらより、次の3点を指摘できる。
  - ① 実習の中での気づきや自己の課題として得られた内容を研究課題に設定し、自分の課題に向き合おうとしている。自分の側から課題を積み上げていく、クリアしていこうとする姿勢は、学生の実直な姿として評価できる。
  - ② 実習で発見した課題や得られた課題という自己の課題から出発できている一方、社会的な視点や統合的な視点を要する領域への関心は、課題設定の出発点には置かれていない。より幅広い視点が持てるには2年生課程における限界も示唆された。
  - ③ ①②を踏まえ、学生の課題設定の出発点を支持しながら、学生が現在捉えている関心課題と引きつけて社会的な視点をもてるような指導を行うことが大切である。

(2) 一概に比較・論じることはできないが、現在の学生の関心領域に比較し、過去の学生における研究課題はより広く設定される傾向があった。これは、本学の内的要因を反映した結果であることを否定しないが、現行カリキュラムである新カリキュラムの問題点と関連する可能性も否定できない。そのため、現行カリキュラムの問題点と、今後の介護福祉士養成教育における課題を下記に示す。

- ① 現行カリキュラムである新カリキュラムは、「介護」の領域が重視された一方で、旧カリキュラムで必修科目として位置付け、現在の介護福祉実践を形成してきたと思われる科目が軽視されている。つまり、社会福祉系科目の比重が低下し、介護実践を特徴づける科目であったレクリエーション活動援助法や家政学系の科目が「介護」領域に吸収され、科目として体系的に学ぶ機会が保障されなくなった。
- ② 旧カリキュラムのどこに問題があったかについては、どこでも検証されないまま新カリキュラムに移行した。介護の専門性や、今後の介護福祉士養成教育の方向性と関連し、現行カリキュラムが介護の役割と専門性を具現化するものであるのか、体系的な学びを保障するものであるのかは、検証されるべき課題である。国により「指定された教育内容」を前提に各養成校はカリキュラムを検討するのであるから、教育の前提条件となる「指定内容」「指定カリキュラム」をどう用意するかの課題は大きい。

## 注

- 注1) 小グループ活動による学習として、春日部市が主催している「介護予防教室」でのレクリエーションを企画・実施した。また、入学時オリエンテーションの一環として、クイズを盛り込んだ「キャンパスオリエンテーリング」がある。入学時のクラス交流は学ぶ仲間作りをする上でも重要と考える。掲示板の場所や教務課の場所などを、小グループによりオリエンテーリング形式で探すプログラムであるが、その目的は、学生生活を送るためには自ら情報を入手することが大切であること、小グループで課題をこなすことによる仲間作り、先輩が1人サポーターとしてつくことによる先輩からの学びなども意図している。入学時の緊張をとくために、教務課などの各場所からクイズを出すなど、レクリエーション的要素も盛り込んだ。さらに、年間を通し、全員参加で役割分担をする「1人1役係」などを行っている。
- 注2) 2年後期に「卒業研究」「事例研究」の2科目を行うには時間が必要である。研究に余裕をもって取り組むことができるよう、指定カリキュラム1800時間中、介護実習を除く1350時間の科目配置比率を、2年後期は20%とした。このうち、同2科目を除く科目配置比率は13.3%である。

## 文献

- 1) 柘崎京子「実習初期段階学生の状況に即したコミュニケーション教育の検討—介護実習第1段階のコミュニケーションに関する学生の自己評価を通して—」共栄学園短期大学研究紀要第2号、2007年3月、69-87頁
- 2) 林義樹・金城祥教編集『看護の知を紡ぐラベルワーク技法—参画型看護教育の理論と実践—』清新看護出版、2004年、p56
- 3) <http://www.pi-forum.org/act/ws/worksh10.html> (2010.5.3 取得)